

三面椿の

「これまで」と「これから」

三面椿の「これまで」

樹齢1400年といわれる三面椿はこれまで多くの災害に見舞われてきました。特に近年では2002年の台風被害によって、西面の根幹が折れてしまい、残されたのは東面の幹のみに。東日本大震災では被害を免れたものの、老木ということもあり三面椿の存続のためには保護への活動が不可欠です。

現在、支柱の設置、肥料の塗布などさまざまな取り組みが行われていますが、さらなる抜本的な保護対策が必要とされています。



三面椿 [sanmen-tsubaki] とは

熊野神社の境内に生える日本最大・最古と言われるヤブツバキ。県天然記念物。熊野神社が創建されたとき、境内の東、南、西の三面にあったことから「三面椿」という名がついた。樹齢1400年と言われている。樹高10.1メートル、根元の外周6.2メートル。岩手県大船渡市末崎町中森17。

三面椿の「これから」

私は「日本ツバキ協会」の一員として、これまで三面椿を守る活動を続けてきました。2002年の台風被害にあった時は、農業高校（現大船渡東高校）の石川正悦先生のご指導の下、日本ツバキ協会大船渡支部が協力し、台風で折れた枝を挿し木にして三面椿の再生を行いました。

他にも陸前高田市の石川精油さんと協力して、黄金の雪という特別な椿油を販売し、売上金を三面椿の樹勢回復に役立てるという活動もしました。

これからは三面椿を観光光面でもっと有効に活用できればと思っています。



日本ツバキ協会大船渡支部
山下 哲夫さん

三面椿を
大船渡の力に



生成インターナショナル
代表取締役 山田 康生さん

三面椿の
油の贈呈を計画



熊野神社宮司
黒野 隆人さん

三面椿を
後世に残す



熊野神社にあるお賽銭箱の奥に、もうひとつあるのが納実箱（のうみばこ）。神社を訪れた方々が、お賽銭の代わりに三面椿の実を入れることでも気軽に参りできる方法として設置されている。

災害と椿

この地には昔から多くのヤブツバキが自生しています。春には真っ赤な花を咲かせ、その美しさと力強さは、まさに三陸に生きる人々そのものを象徴しています。そしてまた、この椿に復興の想いを込める人々がいます。

三陸の地で
深く根を張る
強いこの木は
津波にも
負けることなく
生き残りました。

強い椿のようになり



株式会社 バンザイ・ファクトリー
代表取締役 高橋 和良さん



椿の花で
染め物をしている
小松 ヒトミさん

復活させるという想い



椿の花で
アクセサリーを作っている
野田 はるみさん

テーマは「つなぐ」

震災直前に子供を出産するという経験をして、そこで命の力強さと大切さを実感した野田さん。「椿の花のシリーズには、「つなぐ」というテーマがあります。命を「つなぐ」と、大船渡と他の場所を「つなぐ」ことができたなら良いと思っています。」

幼い頃から身近だったという椿の魅力を再発見した小松さん。「はとって落ちる椿の花は縁起が悪いとも言われるんです。でも、その落ちた花から色素をもらって染め物をするので、新たに復活させるという想いでやっています。」新しく生まれ変わる椿に、大船渡の「今」を重ねてその魅力を伝えていきます。

「樹木の中で椿は特に根を深く張る。立派な太さの椿になるために杉が費やす年数の10倍くらいかかるわけです。ですが一旦太くなると強い。やはり自分たちの考える三陸の復興を考えたときに、深い根を生やすような研究開発をしたいと思っています。会社も従業員も「自分たち自身がそんな椿のようになりたい」との想いで会社のブランドに椿を掲げています。」

椿を通して三陸・大船渡を一緒に盛り上げる企業



酔仙酒造株式会社

ロングセラー商品「雪つ」を賞状に使用した「雪つオールインワンジェル」を2017年10月に発売。その中に大船渡産の椿油を取り入れ、大船渡の新たな特産品を生み出しました。



SAPPORO

サッポロホールディングス株式会社

大船渡の復興を担う子供たちの椿を活用した学習を支援するため、2015年は恵比寿麦酒祭りの売上の一部を、また2016年からは株主優待制度を活用した寄附を続けています。



SHISEIDO

株式会社資生堂

三面椿の香気成分を配合した「リラクシングナイトミスト 椿の夢」を開発・販売。売上の一部が椿の植樹に充てられ街づくりに活かされています。さらに資生堂パーラーでは椿油を使った調理実習を中学校で行いました。